様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年 １０ 月　 １ 日現在

機関番号：３２６９３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５９３４１０

研究課題名（和文）２０代女性の出産イメージの形成過程―少子社会における日本型出産環境の創出に向けて

研究課題名（英文）Characteristics of images of the childbirth held by women in their twenties

研究代表者
谷津　裕子（Yatsu, Hiroko）

日本赤十字看護大学・看護学部・教授

研究者番号：９０３３９７７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：　20代女性の出産に対するイメージを当事者への聞き取り調査を通じて明らかにした。20歳代未婚女性33名に非構成的面接法を行い、得られたデータを質的に分析した結果、20代女性の出産イメージを示す10の特徴が抽出された。20代女性が出産に現実味を感じにくい背景には、就労状況の過酷さや職場や地域社会における家族中心施策の未整備，ロールモデルの不在、ライフデザイン教育の不十分さ等が存在し、これらの問題に取り組むことが少子社会における出産環境の創出に向けた喫緊の課題と考えられた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to make clear the images women in their twenties have of childbirth through interviews of said women. Unstructured interviews were conducted with 33 unmarried women between the ages of 20 to 29 and data was collected. The resulting data was inductively analyzed and ten haracteristics that indicated the images of childbirth held by women in their twenties were extracted. Present behind the fact that approximately half of the participants did not have concrete images of childbirth were the following images: harsh employment conditions for women, inadequate family-centered measures in the workplace and community, the absence of role models reconciling work and childbirth, and inadequate education of both men and women regarding autonomously selecting the timing and method of birth. Addressing these problems was considered a pressing task in order to create an environment conducive to childbirth in Japanese society where the birth rate is low.

研究分野：看護学

キーワード：出産　イメージ　20代女性　少子社会　リプロダクティブ・ヘルス　ウィメンズ・ヘルス

１．研究開始当初の背景

日本の少子化現象において特徴的なことの1 つに，女性の出産年齢との密接な関係がある。1985 年以降，合計特殊出生率を出産年齢別にみると，15～29 歳の各階級では低下傾向が続いており，2005 年以降最も合計特殊出生率が高い年齢層は 30～34 歳となっている。

なぜ 20 代の女性たちが産まなくなっているのか。少子社会を背景として，未婚女性や女子大学生を対象とした妊娠や出産，子育てに関する意識調査が数多く実施されている。目黒・西岡（2000）は，先行研究をもとに少子化現象を「出産回避」,「結婚回避」と位置付け，この現象を「社会システム」,「価値観・意識」,「結婚・出産・育児コスト感」の 3 つの要因群から分析した。2000 年に示された分析モデルではあったが，その後もこの分析結果を支持する多くの研究結果が提出されている（崔，2009；江原，2004；釜野，2004；上廣，2006；笠浪・中元・津間他，2010；厚生労働省，2013a；斎藤・宮原・内山他，2009；佐野・高田谷・近藤，2007；清水・安東・岸田他，2008；篠原，2012；白水・末田，2013；塩沢，2011：山田・川浪・小林他，2011)。これらの結果から，目黒・西岡（2000）が見出した少子化現象に関連する要因群が今も厳然として存在することがうかがえる。

こうした要因群の存在は，20 代女性の出産に対するイメージに影響を及ぼすと考えられる。心理学者である水島（1988）は，個々の社会集団や生活場面に関するイメージは，現実の認知に基づきながらその人の態度や関わり方と相互に影響し合うと指摘する（p. 227)。イメージとは優れて個別的・多面的であると共に社会的・公共的な特性をもつ（水島，pp. 230-231）ことから，21 世紀の日本社会に存在する先述の要因群は，20 代女性の出産に対するイメージと関連し，個々人の出産に向き合う態度や社会への関わり方に影響を及ぼしていることが推測される。

しかし，このような 20 代女性の出産イメージの存在はあくまで推測的であり，上記の仮説を裏付ける研究結果は少ない。そこで本研究では，日本の 20 代女性にみられる出産イメージを明らかにしたいと考えた。そして，少子社会において 20 代女性が安心して妊娠・出産できる出産環境の創出に向けて必要な教育や医療，社会のあり方を考察することとした。

２．研究の目的

本研究の目的は，日本における 20 代女性の出産イメージを，当事者への面接調査によって明らかにすることである。

３．研究の方法

(1)　研究デザイン

質的記述的研究デザインを採用した。

(2)　研究参加者

関東圏内に在住する出産経験のない 20～29 歳の未婚女性，35 名程度を目安とした。

過去の妊娠の有無は問わず，学生か社会人かの別も問わないこととした。研究参加者のリクルートにあたってはコンビニエンスサンプリングとスノーボールサンプリングを併用した。

(3)　データ収集方法

平成 24 年 6 月～9 月に，非構成的面接法でデータを収集した。研究参加者 1 名につき原則として 1 回ずつ 30 分程度，「出産と聞いてどんなことをイメージしますか」,「そのイメージには，どんなことが影響していると思いますか」と尋ね，心の中に浮かぶことを自由

に語っていただいた。また，研究参加者の属性を把握するため，年齢層（20～24 歳，25～29 歳），現在学生（専門学校・短大・大学・大学院の別，専門・専攻・学科の内容）か社会人（就労形態，就労内容）か，最終学歴，現在の居住地，居住状態（独居・家族と同居・その他）と滞在年数を尋ねた。

(4)　データ分析方法

以下のステップを踏み，質的内容分析法にてデータを分析した。①面接が終了したら順次面接内容を逐語録に起こした。②研究参加者全員分の逐語録が作成された時点で，研究参加者ごとに第 1 段階と第 2 段階のコード化（Saldaña，2013）を行ない，サブカテゴリーを用いて各参加者の特徴を明確にするための予備的要約を作成した。全研究参加者のサブカテゴリー一覧表と予備的要約を，研究者全員で読み合せた。③研究参加者全員分のサブカテゴリーを，研究参加者間で比較し，類似性と差異性に着目して類型化しカテゴリー，コアカテゴリー，テーマ，大テーマを見出した。④各テーマに該当するコアカテゴリーおよび属性を研究参加者ごとに整理し，各研究参加者の出産イメージの特徴を明確化した。⑤各研究参加者の出産イメージの特徴を研究参加者間で比較し，大テーマおよびテーマごとに研究参加者全員分に見られたコアカテゴリー数とその割合から全体的傾向を把握した。さらに，④で明確化した研究参加者ごとのコアカテゴリーをパターン・コード化（Saldaña，2013）し，研究参加者の出産イメージの特徴を見出した。

(5)　倫理的配慮

日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会の承認（2012-16）を得たうえで実施された。

また，本研究が平成 24～26 年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(C)）の助成を得て実施されたことを，研究参加依頼書と研究協力依頼書に明記した。

４．研究成果

(1)　研究参加者の概要

研究参加者は 33 名の女性であり，内 14 名が 20～24 歳，19 名が 25～29 歳であった。

(2)　20 代女性の出産イメージの特徴

研究参加者ごとのコアカテゴリーの分布状況を分析した結果，20 代女性の出産イメージを表わす 10 の特徴が明らかとなった。

①　特徴 1： 研究参加者のほとんどは出産に対して《肯定的イメージ》と《否定的イメージ》の両方を併せもつ

大多数の研究参加者（30 名，90.9%）は，出産に対して〔大事にするべきもの〕，〔幸せを感じるもの〕，〔喜びをもたらすもの〕等，出産を望ましいものとして称賛・承認する《肯定的イメージ》と，〔痛いもの〕，〔負担なもの〕，〔負い目を感じさせるもの〕等，出産を望ましくないものとして否定・否認する《否定的イメージ》の両方を抱えていた。

②　特徴 2：ほとんどの研究参加者の出産イメージには広がりがみられる

大多数の参加者（30 名，90.9%）の出産イメージは，2～3 つの大テーマ，5 つ以上のテーマにまたがって形成されていた。中には，コアカテゴリーが 9 つ以上のテーマに分散し，かなり幅広いイメージをもつ研究参加者（8，9，13，26，27 さん）もいた。これらの広がりには，少数のイメージを軸にして波及的・連結的にイメージがつながっていく“連関パターン”と，様々なイメージが分散して存在する“分散パターン”がみとめられた。

③　特徴 3：《肯定的イメージ》ないし《否定

的イメージ》を全くもたない研究参加者がわずかながら存在する

研究参加者のうち 3 名（9.1%）は，出産に対して《肯定的イメージ》が全くなく否定的なイメージだけをもつか（10，16 さん），逆に《否定的イメージ》が全くなく肯定的イメージだけをもっていた（2 さん）。

④　特徴 4：約半数は出産に対して現実味を感じていない

研究参加者の約半数（17 名，51.5%）は，出産を〔現実味がないもの〕（《中間的イメージ》）と捉えていた。すなわち，出産は，「想像と現実が異なる」，「体験しないとわからない」，「生活体験として身近にない」，「考える機会がない」，「モデルとなる女性が職場にいない」，「漠然とした願望だけがある」，「優先順位の低い時期不相応なもの」，「状況・環境が整っていなければ考えられない」，「教育されておらず知識が乏しい」，「正確な情報に欠け不透明である」ことから，〔現実味がないもの〕として捉えられていた。これらの要因は 1 人に 1 つではなく，複数個の要因が存在していた。

⑤　特徴 5：4 割強の研究参加者が出産に対して〔痛いもの〕というイメージをもつもののそれが出産への忌避感に結び付いてはいない

研究参加者の 4 割強（14 名，42.4%）が，出産は〔痛いもの〕という《身体的イメージ》をもっていたが，そのイメージが，出産を忌み嫌ったり，出産は乗り越えられないものだと捉えたり，産痛は取り除くべきものと考えたりすることにはつながっていなかった。

⑥　特徴 6：《ジェンダー的イメージ》は出産を女性にとって望ましいものとする考え方とそうでない考え方とに二分される

《ジェンダー的イメージ》には，出産は〔母性愛を引き出すもの〕，〔女性の幸せ〕，〔女性なら体験したいもの〕，〔母になる瞬間〕，〔女性が家庭に入る好機〕等，出産を女性にとって望ましいものとする見方と，それとは逆に，〔女性を孤立させるもの〕，〔母親像を押し付けるもの〕等，出産は女性の自由を奪い人々にステレオタイプな母親像を植え付ける，女性にとって望ましくないものであるとする見方が存在した。

⑦　特徴 7：《時間的イメージ》は出産年齢を意識するものとキャリア形成との兼ね合いを意識するものに二分される

《時間的イメージ》には，出産は〔「若いうち」に体験したいもの〕，〔年齢を意識させるもの〕，〔タイムリミットがあるもの〕等，若い母親への憧れ，加齢に伴う卵子の老化，適齢期ゆえの切迫感といった出産年齢を意識するものと，〔仕事とのタイミングを計るもの〕，〔職業人としてのキャリアに準備が必要なもの〕，〔遅れがちなもの〕等，出産と仕事を両立するために必要となる時間調整を意識するものとが見いだされた。

⑧　特徴 8：研究参加者の 3 人に 1 人は，出産と仕事の両立は難しいというイメージをもつ

研究参加者の 3 分の 1（11 名，33.3%）が，出産は〔仕事との両立が難しいもの〕という《社会的イメージ》をもっていた。そのようなイメージを抱く要因として，独身の今でも仕事が大変なので結婚したら仕事を辞めざるを得ないと考えることや，代理の利かない仕事であること，残業の多い仕事であること，育児期間の職場環境が整っていないことなど，職場環境の後ろ盾の弱さが背景にあり，出産と仕事を両立する役割モデルが存在しない中で出産後に再就職することの難しさを実感し，

出産するなら仕事をあきらめることが前提となると考えていた。研究参加者たちは妊娠・出産と共に休職や退職を余儀なくされている女性の存在を，職場の同僚や先輩の体験，知人の話，ニュース報道等，さまざまな機会に見聞きし，〔仕事との両立が難しいもの〕という出産イメージが確かなものとして印象付けられていた。そうした現状を踏まえ，性差による不平等感や子育て政策の不十分さを感じ，社会に対して憤りを覚える者もいた。

⑨　特徴 9：研究参加者の 5 人に 1 人は，出産に対して負い目を感じさせるものというイメージをもつ

研究参加者の 5 分の 1 強（7 名, 21.2%）が，出産は〔負い目を感じさせるもの〕という《社会的イメージ》をもっていた。具体的には，同世代に出産経験者が増えることや親からの結婚への期待がかけられることを通して出産を意識し，それがかなわない現状から社会に対して自責の念を抱いたり，出産を身近なこととして捉えられない自分に対し罪悪感を抱いたりしていた。

⑩　特徴 10：《対社会的理想イメージ》には社会に対する不満と期待が反映されている

研究参加者が語る《対社会的理想イメージ》には，女性が自ら出産を希望し行うにあたり現代の日本社会に欠けていると思われるものや，その問題の解決に向けて必要とされる職場や地域社会における家族中心の施策，出産と仕事を両立するロールモデルの存在，出産や育児について深く理解し自律的に選択できる人間を育てる教育のあり方が示された。

(3)　考察

本研究で抽出された 88 のコアカテゴリーには，20 代女性が出産に対して抱くイメージの種類の豊富さと複雑さが映し出されていた。特徴 1 や特徴 2，特徴 3，特徴 6 に示されたように，否定的イメージのみを有する者は全体の 1 割弱にとどまり，大多数の研究参加者は出産に対して肯定的イメージと否定的イメージを併せもっていることや，それらのイメージが波及的に連結したり分散的に存在したりしながら個々の女性の中に広がりのあるイメージを形成していることが明らかになった。

本研究結果の特徴 4 において，研究参加者の約半数は出産に対して現実味を感じていないことが示された。社会人として歩み始めたばかりの 20 代女性にとって妊娠や出産というライフイベントの優先順位は高くはなく，約半数が出自家族と同居中であり未婚・非婚状態であっても経済的・精神的な満足感が維持されやすい生活状況にあること，妊娠・出産・育児と仕事を無理なく両立しながらキャリアを形成している役割モデルが周囲に見当たらず，妊娠・出産を視野に入れたライフデザインを描きにくい環境におかれていることが，出産イメージに対する現実感のなさにつながっていることが示唆された。とりわけ，研究参加者の語りからは，日本型雇用慣行が根強く残る中で女性ばかりが性別役割分業と経済活動の「二重負担」を負う事実とその過酷さを，20 代女性は，自身の職場や出自家族を通してまざまざと感じ取っていることがうかがえた。

妊娠や出産が，20 代女性にとって他でもない自分に起こり得るライフイベントであり，必要なときに主体的に取り組める選択肢として位置づくとき，はじめて女性は出産イメージに貼りつく〔負担なもの〕，〔仕事との両立が難しいもの〕といった否定的イメージを刷新し，出産に対して〔大事にするべきもの〕，〔幸せを感じるもの〕といった肯定的イメー

ジを躊躇なく表明することができるようになるのだろう。そのためには，20 代女性の眼前に立ちはだかる出産と仕事の両立を困難にさせる社会環境や労働環境，男性を含めた妊娠・出産・育児に対する意識の変革が必要になると考える。

21 世紀に入り，政府が取り組んでいる女性の妊娠・出産・育児と仕事との両立に向けたさまざま支援と社会の動きは，出産や育児に対する人々の意識や行動に肯定的な影響を与えることだろう。助産師には，こうした社会の動きを促進するように職能団体のホームページなどで行政や企業の取り組みに賛同していることを表明していくことが求められるだろう。また，育児への満足感や育児意識に父母間で差があることが明らかになっているが，その一因は「子育ては母親中心で父親はできる範囲内のことを手伝う」という社会規範にあると考えられることから，父親は育児を「手伝う」ではなく「行うことが普通である」という認識のもとに助産師によるかかわりを工夫していくことが必要だろう。さらに，日本の経済再生の 3 本柱の 1 つである「成長戦略」に掲げられた「待機児童の解消」や「職場復帰・再就職の支援」において，育児環境の見直しをする役割を助産師が果たすことも重要である。教育の現場においては，自分がいつ結婚・出産をするかなど，性の価値観・知識・自己決定などの教育を行うライフデザイン重視の性教育や，義務教育に限らず高校・大学・職場など生涯にわたり性教育が受けられるようにしていく仕組みづくりに，助産師が積極的に関与することも大切である。最後に，女性が自分のライフプランを見据えた妊娠・出産のあり方，仕事と生活の両立上の問題，女性特有の症状や健康課題等を，専門職である助産師に気軽に相談できる場所として，「助産外来」が 20 代女性を含めた様々なライフサイクルにある女性たちに開かれることは有益であると考える。

５．主な発表論文等

[学会発表]（計１件）

①谷津裕子、20 代出産イメージの特徴、日本看護研究学会第 40 回学術集会、平成 26 年 8 月 23 日、奈良県文化会館（奈良県・奈良市）

６．研究組織

(1)　研究代表者

谷津　裕子（YATSU, Hiroko）
日本赤十字看護大学看護学科・教授
研究者番号：９０３３９７７１

(2)　連携研究者

佐々木　美喜（SASAKI, Miki）
日本赤十字看護大学看護学科・助教
研究者番号：８０４３８５４８

千葉　邦子（CHIBA, Kuniko）
日本赤十字看護大学看護学科・講師
研究者番号：４０５５３５７４

新田　真弓（NITTA, Mayumi）
日本赤十字看護大学看護学科・講師
研究者番号：００３１８８７５

濱田　真由美（HAMADA, Mayumi）
日本赤十字看護大学看護学科・助教
研究者番号：００７３４９８０
（平成 26 年度より連携研究者）

山本　由香（YAMAMOTO, Yuka）
日本赤十字看護大学看護学科・助教
研究者番号：００５８８８５８

(3)　研究協力者

芥川　有理（AKUTAGAWA, Yuri）